

月刊

立川と語ろう 立川に生きよう

# えくてびあん

7

《EKUTEBIAN VOL.8 JULY 1991-EKUTEBIAN》



たき

まい あーと ■「多紀織フラワー」by 岡嶋多紀

# 往時しのべば 「塩の道」

立川市と大町市（長野県）が姉妹都市となり、交流がますます盛んになってきている。立川人145人が「塩の道」を体験してきたのも、その一つ。塩が貨幣ほども尊ばれ牛馬によって運ばれた昔日を想いでの一日は単に行楽とは言い切れない「歴史」を味あわせてくれた。

（写真提供/鈴木 功氏ほか）



「たちかわ」のノボリを立てて、もう雰囲気はお祭り気分。

早速に往時の身  
支度をして「塩  
の道」を体験せ  
んと。山国の陽  
光あびでの出発



歴史再現とばかりに、重い塩の荷を背にした馬まで調達してくれて。



前日、この地方独特の藁細工や、藁麦打ちを実際に習い覚えてきた立川人。

ことわざ問答

漢字一字挿入せよ
口に密あり
腹にあり
箱根らざるの
江戸話

7月31日
日本フィル
夏休み
親子コンサート
於・市民会館大ホール
問合せ・26-1311

立川に残る唯一の地下水湧水による矢川は、立川段丘と青柳段丘との崖線に沿って流れている貴重な川である。立川の地名(保坂芳



春著)によれば、矢川は「谷川」であってその「や」とは草が繁茂して水のある湿地、そこから流れ出た小川のことである、と説明している。矢川周辺で、これまでたびたび発掘された向道遺跡は、縄文文化の繁栄を伝え、古老の話からも矢川は日常生活と切り離すことが出来なかったようである。近年、荒放題となった矢川の自然を

「この物語はウチをモデルにしてあるんじゃないか」と思われる人も多いのではないだろうか。女性の社会進出によって「男は仕事、女は家庭」という(常識)はすでに通じなくなってきたが、人間の生活はほとんど保守的に営まれているらしく、田舎依然の役割分担に固執して、「男が主、女が従」の価値体系の中でアグラをかいているケースも少なくない。作者の梶山さんは資料は与えられたが、ストーリーそのものは独自に編み出したものと語っている。梶山さんは、こう語る。

残そうとの要望から、昭和五十三年三月、東京都は「緑地保全地域」に指定し、家庭排水の流入防止や周辺の植栽湿原に木道を造るなどを整備した。さて、矢川の自然の中でわずかに生き伸びている貴重な植物を今いくつか見ることが出来る。水生植物の代表はミクリだ。清水を好み水中に根を張ってそこから立ち上り、花序が球状でクリのイガを思わせることからその名がある。カワジヤやクレソンなどの繁殖もきれいな水にふさわしい。湿地帯ではヌマトラノオの清楚な姿、細かな淡紫色の群落チゴザサの開



矢川・いまも大自然をたたえて

マンガ『パパの玉子焼き』をあなたはどく読むか

社会の価値観がこれ程に変動している時代も珍しい。「家庭のあり方もまた問われている昨今、貴方ならどう反応する？」



「なにも家事はしない夫は仕事一辺倒。妻は仕事をしなうえて家事育児にも全面的に責任をもつてやっていたのですが、ついにこのパターンではやっていけなくなり、手探りのなかから一つの方向を見つけてゆくというストーリーなんです。これを描いていながら、環境問題やら、高齢社会などという問題をかかえ、ほんとうに難問だらけの中に私たちは立たされた。いと思わざるを得ませんでした。家庭の中の役割分担という問題も表面的になぞったのでは解決しないのではないのでしょうか。ママに代わってパパが初めて台所に立ち、子供たちから「おしいい!」と誉められ喜ぶのもつかの間、またまたトラブルが発生して、世に問題の種は尽きない、か。」

この「パパの玉子焼き」は各学校でも配布されたこともあって、急速に市民の間で読みはじめられたもの。発行は立川市役所の企画部、作者は女流の漫画家・梶山直美さんというユニークな取合せだ。それというのも、先般、市は「立川市女性行動計画」を策定、市民の代表によって推進会議が発足、そこから「家庭教育のあり方」が報告されている。今回の梶山作品「パパの玉子焼き」は、これらの問題を広く市民に考えてもらう糸口として提起されたもの。マンガという誰にでもわかりやすい形態をとって、老人に至るまで幅広い。そして、読んでいるうちにハッとさせられる箇所にも必ずぶつかる。

表紙は語る

まい あーと「たき織 フラワー」by 岡嶋多紀
「原料は木綿なんですけど、その木綿をパイアステープに切り、これをヨコ糸にして織りあげた布を湯洗い、水洗い、起毛仕上げの工程を経ますとほんとうに、一枚の布が見違えるように新しいイメージをもちはじめます。」

給与振込は(ハートの銀行)
全国約360か店の便利さを活用ください。
ハートの銀行
第一勧業銀行

岡嶋さんが「たき織」を通しての作品づくりは意欲的で、衣食住にわたっている。衣服ではジャケット、ベストなど。また食卓に載るものとしてはランチョンマット、コースター、ポットカバーなど。住いに関するものではタビストリー、テーブルセンター、造花、クッション等。「ギヤラリー四季」(曙町)での展示会に飾られた素敵な「多紀フラワー」を表紙にいただいた。

立川クイズ

ちよつと立川の地図を広げてみましょう。市の北部を西から東へ流れる川、ご存知玉川上水です。西の端からずうっと通つていきますと、天王橋の東の辺りでナント北から南へ流れる残堀川とクロスしてあります。川と川の交差点? 一体どうやって……

- ①玉川上水が地下に潜り残堀川の緑の上水の道を散歩がてら実施調査してみるのはヨロシイかと。
【6月号の答え】
市内で一番広い児童公園は高砂公園(高松町二丁目)です。六七三三の園内には地元の人たちが植えた桜の木がいっぱい。地域の暮らしにとけこんだ、お花見の名所となっています。

下をくぐる②残堀川が地下に潜る③玉川上水がかけ橋式に残堀川の上を流れている。

本誌が傑作写真を大募集!

一年間、ご愛読いただいた「立川発・カルチャー・トレイン」も無事に連載を終え、来月8月号から新連載がスタートする。テーマは写真。題して「ナイスショット!私の傑作選」。この立川には多くの写真愛好家がおり、新機種の登場、フィルム品の品質高度化などで、ますますファインが増えている写真界。アマ、プロを問いません。あなたの傑作写真(一人一枚限り)を当工房までお送りください。

たましん歴史・美術館
がオープン
多摩信用金庫(本店・曙町)では去る四月に「たましん地域文化財団」を設立したが、六月十日には財団の運営になる「たましん歴史・美術館」がオープン(国立支店)、その披露パーティーが盛会のうちに行なわれた。同館は多摩地域の歴史民俗および美術を展示してゆくが、理事長の中嶋榮治氏は挨拶のなかで、多摩地域は人口350万人を有するが自然、歴史、人材など独自の特性を生かした活動を展開したい、と力強い展望を示した。

真如苑だより

炎天がつづく昨今です。酷暑は秋の爽りを約束するものさうです。少し先の季節に希望が持てるのも四季の喜びです。今月も真如苑では皆さまで涼しいおもてなしをお迎えいたします。
日時 7月15日(日)
午後2時~4時



立川市立図書館
のより時計
のより時計

東風
財団法人「たましん地域文化財団」が運営する「たましん歴史・美術館」が開設された。昭和49年に本店(曙町)の一部を地域美術ギャラリーとして貢献してきた功績は大きい。また、歴史に対する視線も確かで、「多摩のあゆみ」は季刊で63号を数える。しばしば、専門的にすぎず記事や論説が目につくが、この季刊誌がなければ間違いなく貴重な資料のおおくが散逸していったことであろう。地域に貢献するという、地域独自の美術を盛り起こすという。言葉では簡単だが「たましん」の場合が示しているように、地歩を築くこと何年にも互に、ようやくして事の一部が成就する。文化とは真にゆつたりとした歩みであるらしい。ヨーロッパの街まちには、ローカルな味を生かしたしやれた美術館や博物館がある。日本にもあんなう地に根ざした文化が必要なのだとよく耳にする。が、遠い他国の景色としてではなく、わが身に引きつけてかかえたらどうなるのだろうか。ことは美術ばかりではない。多摩は今、350万人を擁している。東京の区部とは違った自然や歴史に囲まれている、独自の文化の中で生きているのが「多摩人」であり、もちろん「立川人」も例外ではない。地球儀を眺めるとこの日本はユーラシア大陸の極東に位置していて、「地域」をなしていることが、よく分る。空疎の身の透くばかり、えくてびあんの

# 立川の北川冬彦さん



若葉町と国分寺市との市境に、日本の詩壇の巨匠、北川冬彦さんが住まわれていたご自宅がある。自然を愛し、動物を愛し、やさしく、心温かく、詩に対してどこまでも情熱的であられた北川さん。それはそのまま受け継がれ息づいている。ここはそんなまちである。



立川市民体育館前にある詩碑。



北川冬彦全詩集。眼鏡。ご自宅の栂杓の木から作った栂杓酒。



## 立川発 カルチャートレイン

半日ほどの「小さな旅」へ出てみませんか。そこには思いがけなく自然が息づいていたり、懐かしい「この人」に会えたり。

最終回



動物好きだった北川さんのお宅には今もチャボや猫がいる。最近小猫が3匹生まれました。北川さんの一閑忌を記念して、物惣忌が毎年6月に開かれる



立川駅から市民体育館までバスで約10分